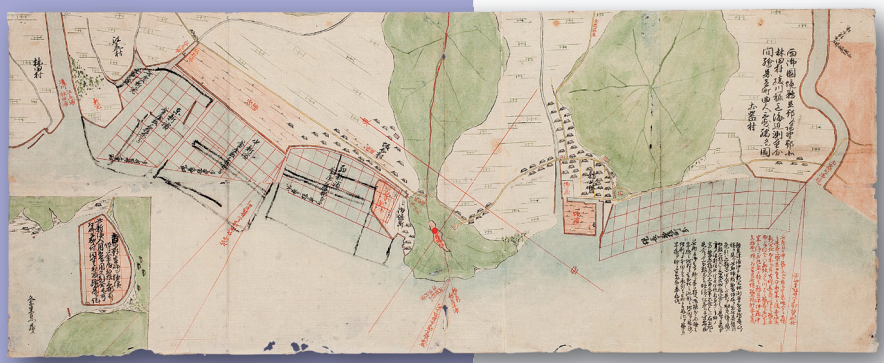
郷土博通信

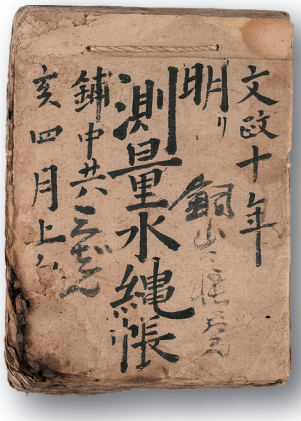
No.14

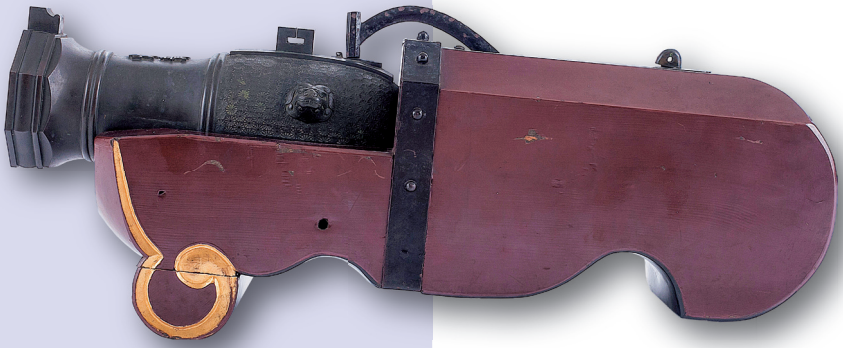
2019 秋



【重要文化財】

久米通賢関係資料 修理報告展 を開催します！





CONTENTS

■「久米通賢関係資料」修理資料 ―― 1
■修理報告展紹介 ―― 2～4
■勾玉づくり体験講座 ―― 5
■国土地理院から感謝状が贈呈されました ―― 6
■INFORMATION ―― 6

公益財団法人 鎌田共済会郷土博物館

第1展示室

「久米通賢関係資料」の保存と修理

郷土の偉人久米通賢に関する資料は、代々久米家に伝えられてきましたが、明治末年頃にはその一部である測量機器や銃砲などが、後に鎌田共済会会頭となる鎌田勝太郎の手に移りました。大正11(1922)年には通賢の曾孫、栄氏より久米家所蔵の資料のほとんどが寄託され、鎌田家所蔵分も含めて久米資料の主要なものは当共済会に集まり、管理されることとなりました。

この年には図書館(現在の博物館建物)が開館し、調査部が設置され、岡田唯吉主事が中心となり郷土資料の調査・展示が進められました。大正14(1925)年に郷土博物館(図書館の南にあったが平成4(1992)年に取り壊され、図書館建物へ移転した)が開館すると保管・調査・展示の拠点となり、その機能は現在まで続いています。通賢の資料はこれまでに何度か修理・修復が行われてきました。その時代の技術と価値観にもとづいた修理・修復ですが、通賢の業績を伝えるためのさまざまな努力のひとつであるととらえることができます。

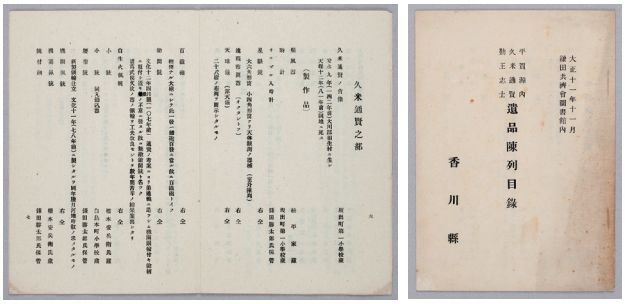
文化財はどれだけ大切に管理していても、温湿度の変化やカビ、害虫などによる劣化のほか、地震や風水害などの自然災害、戦禍など、さまざまな影響を受け傷んでしまいます。文化財の維持管理については、永らく所有者にゆだねられてきました。しかし明治になると徐々に法整備が進み、昭和25(1950)年の「文化財保護法」制定により、文化財の修復事業に対する補助金制度など、国・県・市がサポートする体制が整えられました。平成26(2014)年、当館が所蔵する通賢の資料1061点が重要文化財に指定されたのをきっかけに、特に傷みが見受けられる92点については、平成27(2015)年度から平成30(2018)年度にかけて補助金の交付を受け、修理を行うことができました。

第1展示室では、大正末頃から昭和初期に行った通賢に関する展示や調査の記録を、第2展示室では、通賢の多岐にわたる業績をご紹介します。第3展示室では今回修理した「久米通賢関係資料」を展示し、どのような技術を使って修理が行われ、どれだけ状態が改善したのかをご報告いたします。(一部、大きな資料は第2展示室で展示しています。)

資料をご覧いただき、久米通賢の業績のすばらしさに触れることによって、私たちは何のために文化財を守るのか、どうやってこれらを伝えていくのか、そしてそのためにはいかに多くの支えが必要であるのか、普段、私たちが展示品を見る折には意識しないことを、今回の展示を通じて考えていただけたら幸いです。

(宮武 尚美)

▲旧郷土博物館外観
通賢の資料は2階に展示されていました。



▲平賀源内・久米通賢・勤皇志士　遺品陳列目録
博物館（左写真の建物）が開館する前の大正11（1922）年11月に、図書館（現在の博物館建物）で開催された展示の目録です。

久米通賢資料室

第2展示室

古文書の修理について

当館が所蔵する「久米通賢関係資料」の古文書には、害虫による本紙の虫喰い（虫損）や欠失、湿気や水濡れの影響によるシミ、使い込むことで生じる折れ、擦れ、破れ、継ぎ目部分の糊ばなれ、汚れ・ホコリ・退色、ヤケ（焼損）による炭化などの傷みが確認されていました。平成27～29年度（2015～2017）に、「御内御用海辺側量方位記 寒川郡分」や「経済元禄記」など83点が株式会社 修美によって修理されました。

今回の修理は、本紙と同質の補修紙を作製して補修するなど、今以上に傷みが進まないような状態にするという方針で進められました。

古文書には紙切れ1枚のものもあれば、複数枚の紙を貼り継いだ続紙、複数枚の紙を綴じた冊子や、貼り継いだ文書を巻物状に装丁した巻子、縦横に貼り継いで折り畳まれた大型の絵図・地図などがあり、その形状はさまざまです。

修理工程は、まず、古文書の形状、縦横の長さ、傷みの種類や程度、裏打ちの有無、紙質（原料となる植物は何か、和紙を漉（す）く時にできる簀目（すのめ）や糸目の数、紙の厚さ、重さ）などを調べて記録し（①）、写真撮影を行ないます。次に、冊子や巻子は、装丁された形状を解体し（②）、二つ折や袋綴じされたページを開いて本紙全面が修理できるようにします。解体の前後には、やわらかい筆を用いてクリーニングを行い（③）、本紙を補強する裏打紙が施されている場合は、ピンセットなどを使ってていねいに除去します。一方、修理前に確認した紙質のデータをもとに、資料ごとに本紙と同質の補修紙を作製します。その補修紙を使って欠失部分を補い（④）、糊ばなれ箇所は継ぎ直し、貼り紙や付箋（ふせん）も貼り戻し、冊子や巻子などは元の形状に仕上げます（⑤）。

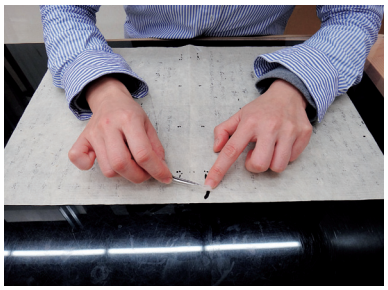
修理を終えた資料には、資料番号を記した和紙ラベルを貼ります。修理後の状態を写真撮影して修理記録を作り、資料は渋紙の畳紙（たとうし）に納め、さらに中性紙の保存箱に入れて大切に保管します。このように、貴重な文化財を次の世代に引き継ぐための修理は、多くの人たちの高度な知識と技術に支えられているのです。

（齊藤 祐司）

▲①本紙の紙質調査

▲②横半帳の解体

▲③筆を使ってのクリーニング



▲④欠失部分の補修

▲⑤仕上げ

第3展示室

器物の修理について

当館には、久米通賢自ら製作したと伝わる測量機器や銃砲類など重要文化財に指定された器物が、25点あります。それらのうち星眼鏡、自然水、翻傘三本開、火矢筒「憤龍」、地球儀（2点）、天球儀、地雷火用桶、小置時計の9点に傷みが認められ、平成30（2018）年度、公益財団法人 元興寺文化財研究所に修理を依頼しました。

修理に入る前には燻蒸を行い、資料の中に潜んでいる害虫や卵、カビなどを根絶やしにします。器物は異なる複数の素材から構成されているので、それぞれに合った修理をするためにも各資料を観察し、傷み具合など調べます。また記録として写真撮影を行い、資料によってはさらにX線透過撮影をして内部構造などを確認する必要があります。

調査の結果、修理前の状態は、長年保管されている間にたまったチリやホコリが多少あるものの、極端に汚れてはいないことが分かりました。各資料の木製部分は、害虫による被害でスポンジのようにもろくなってしまったものや、歪んで剥離しているものがありました。また金属部分にはサビがあるものの、進行性のサビは確認されませんでした。地球儀や天球儀の球体は、表面の彩色層が浮いてはがれ落ちそうになっていました。

これら修理前調査をもとに、修理の方針を立てます。必要以上に手を加え復元するのではなく、現在の状態を維持し、取り扱うときに必要な強度を持たせることを基本方針としました。

修理に際してまず資料表面に付着したホコリなどの汚れを、刷毛やブラシなどで取り除きます（①）。木製部分については虫食いなどでもろくなった部分に樹脂を補填して強化し（②）、破損した部分は補修し（③）、剥離した部分については接着しました（④）。サビが発生した部分についてはサビを取り除き、進行スピードを緩める、もしくは防止する処置をとりました（⑤）。地球儀のように彩色されているものや墨書されている部分には、剥落止めを行いました。

このようにして修理を終えた資料は、修理に関する記録とともに返却されてきます。

文化財を維持し、次の世代へつなげていくためには、日々の管理に加え、時には修理することが必要になります。修理することで劣化の進行を遅らせる、あるいは破損する危険性を軽減させることができるからです。

（宮武 尚美）

▲①自然水　クリーニング作業

▲②地雷火用桶　虫損部分の補填強化

▲③翻傘三本開　筒羽部分の欠損部補修

▲④星眼鏡鏡筒　剥離部分の接着

▲⑤火矢筒「憤龍」　砲身防サビ処置

勾玉づくり体験講座

体験講座を終えて　香川県埋蔵文化財センター
長井博志

古代人のオシャレに挑戦　～勾玉づくり～

遺跡を発掘調査すると、多く見かけるのは当時の人々が使っていた土器や石器です。

ただ、これらの道具ほど多くないものの、彼らの身体を飾ったアクセサリーも時々出土します。当時のアクセサリーはおしゃれのためだけでなく、まじないや権威を示すなど様々な目的で使われました。

こうしたアクセサリーの中で長い歴史をもち、現在も愛用されているのが勾玉です。7月27日（土）、鎌田共済会郷土博物館で行われた勾玉づくりに大人から子どもまで31名の参加者が挑戦しました。

本文ではアクセサリーの歴史とイベントの様子を紹介します。

●アクセサリーの歴史

◆縄文時代のアクセサリー

この時代のアクセサリーには牙や石、粘土など身近な素材で作ったペンダント、腕輪、耳飾りなどがあります。これらのうち、イノシシなどの牙やサメの歯に孔をあけた玉類は、それらの力強さにあやかって身体、生命を守る力を得ようとして身につけたと考えられています。また、石製の勾玉もこの時代に現れます。

◆弥生時代のアクセサリー

縄文時代の終わりごろに大陸や朝鮮半島からもたらされた水稲耕作は、弥生時代に各地で広まりました。この新来の農耕文化とともに金属やガラスなどが伝わり、これらの新しい素材で作られたアクセサリーも使われるようになりました。勾玉にもガラス製のものがあります。青や緑に光るガラスは、美しい希少品として珍重されたでしょう。

◆古墳時代のアクセサリー

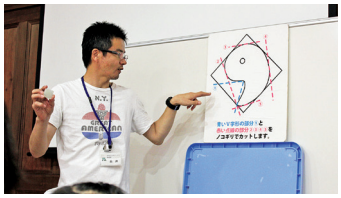
古墳時代には日本列島の各地で前方後円墳など大きな墓が築かれました。アクセサリーでは古墳に葬られた人が身につけていた玉類や耳環などが代表的なものですが、集落からも様々な種類、材質の玉類をはじめとする多種多様なアクセサリーが出土しています。

このため大きな古墳に葬られるような権力者だけでなく、多くの人々がアクセサリーを身につけていたと考えられます。

●勾玉づくり

今回の勾玉づくりではハンコなどを作るのにも使われる柔らかい石（滑石）を使って勾玉を作りました。手順は右のとおりです。

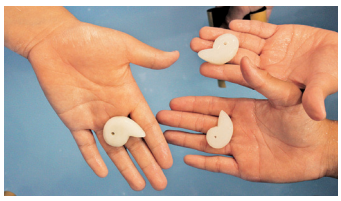
今回の講座では香川県埋蔵文化財センターの職員とボランティアが講師を務めました。参加者が出来上がった勾玉をお互いに見せ合う際の笑顔に、ほっこりとした一日でした。



①作り方の説明。立方体の石に勾玉の形を描き、不必要な部分をノコギリで切り落とす工程の説明です。

②ノコギリで余分な部分を切り落としたら、金ヤスリを使って削ります。

③金ヤスリで1時間ぐらい、ひたすら削ります。すると、勾玉らしい丸みを帯びてきます。



④出来上がり。
作った人それぞれの気持ちがこもった、夏の思い出の完成です。

参加者からは

- イメージどおりの形ができてよかった
- やすりで削るのが大変だったけど、面白かった
- 夏休みの工作ができた
- 最後に洗うと、黒いキレイな模様が浮かびあがって、とてもうれしかった
- 親子で楽しめてよかった、などの声をいただきました。

国土交通省国土地理院から感謝状が贈呈されました

感謝状

公益財団法人
鎌田共済会 郷土博物館 殿

貴団体は久米通賢の功績を広く紹介することを通じて、地域における測量・地図の普及・啓発に多大な貢献をされました
その功績は誠に顕著でありここに深く感謝の意を表します

令和元年六月二日
国土交通省国土地理院長
川崎茂信

国土交通省では、測量の意義及び重要性に対する国民の理解と関心を一層高めることを目的として、平成元(1989)年から6月3日を「測量の日」と定めています。そのなかで国土地理院では、「測量の日」の記念事業の一環として、測量・地図に関する普及・啓発に功績のあった個人又は団体に感謝状を贈呈しています。

今年度は当館がその対象に選ばれ、令和元(2019)年6月2日(日)に国土交通省国土地理院(茨城県つくば市)において、感謝状が授与されました。

当館で紹介している久米通賢は、江戸時代に様々な分野で活躍し、多くの事績を残しています。なかでも自ら製作した測量機器とそれを使用して測量した記録類、地図や設計図類からは、通賢の技術の高さをうかがうことができるだけではなく、地元坂出の塩田開発など地域の発展に直接結びついていることがわかります。このような通賢の功績を長年にわたって展示し、広く紹介し続けてきたことが、地域における測量・地図の普及・啓発に多大な貢献をしてきたと国土地理院に認められました。

大正14(1925)年の開館以来の当館の活動と、関わってこられた諸先輩方の努力が高い評価を得たことは、現在の職員一同にとっても大きな励みとなりました。今後も郷土博物館として地元の歴史や文化を広く伝えることを通じて、次の世代への架橋となれるよう、より一層研鑽を重ねてまいります。

▲功労者感謝状贈呈式の様子

INFORMATION

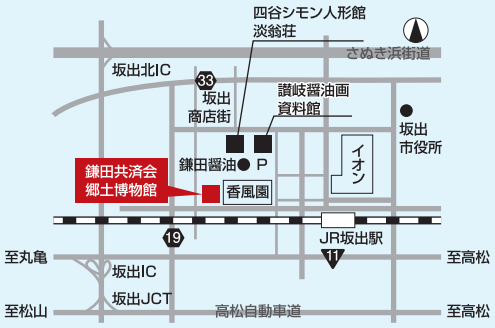
■鎌田共済会郷土博物館　第10回公開講座

「重要文化財
久米通賢関係資料の保存修理
― 装潢(そうこう)修理とは ―　」

2019年**10**月**19**日(土)　13:30~15:00(開場13:00)
会場:鎌田共済会郷土博物館2階講堂
講師:宇都宮 正紀(株式会社 修美)
【申込9月24日(火)から、先着40名、参加無料】

電話・FAXかHPのフォームからお申込み下さい。
電話:0877-46-2275　　FAX:0877-45-0035
HP:https://www.kamahaku.jp/

鎌田共済会郷土博物館



Access
高松から…快速マリンライナーで約15分
岡山から…快速マリンライナーで約40分
JR予讃線坂出駅から徒歩5分
※駐車場あり

開館時間:午前9時30分~午後4時30分(入館は4時まで)
休 館 日:月曜日/祝日
　　夏季特別(8月13日~15日)
　　年末年始(12月29日~1月4日)
入 館 料:無料

❶天球儀
❷小置時計
❸西御国境鵜足郡ヨリ阿野郡北林田村綾川裾迄海辺測量分間絵図壱町曲尺三歩ニ縮タル図
❹明リ測量水縄帳
❺火矢筒「憤龍」

□発行 令和元年 10 月 1 日　□発行所 公益財団法人 鎌田共済会郷土博物館 〒762-0044 香川県坂出市本町 1 丁目 1 番 24 号
TEL：0877-46-2275　FAX：0877-45-0035　HP：https://www.kamahaku.jp/　e-mail：k-museum@kamahaku.jp